

日本学術振興会科学研究費アウトリーチ事業

※この講演会は、JSPS科研費JP 24520222の助成を受けたものです。

# 有馬朗人先生公開学術講演会

主催 伊藤伸江（科研費基盤研究C「24520222 中世歌学の享受から見た心

敬の文学作品の創造と新撰菟玖波文学圏への影響に関する研究」研究代表者）

共催 愛知県立大学地域連携センター

後援 俳句ユネスコ無形文化遺産登録推進協議会、朝日新聞社、朝日カルチャーセン

ター、中日新聞社・栄中日文化センター

二〇一七年七月五日（水）於愛知県立大学長久手キャンパス講堂

## 西洋の詩と東洋の詩、特に日本の詩

### 〈科学と文化の交錯の先に〉

講師 有馬朗人氏

（国際俳句交流協会会長・元文部大臣および科学技術庁長官、元東大総長、文化勲章受章者）



科研費  
RESEARCH FUND

# 東洋の詩 と 西洋の詩

特に日本の詩  
科学と文化の交錯の先に

日本と世界の詩歌をテーマとし、多くの名句、名歌を讀みながら、それぞれの地域の持つ固有の歴史の中で育まれた、叙景・叙情のあり方を比較し、日本の詩歌の特性を見つめる。

さらに、洋の東西を問わず、世界各地で広く享受されている日本の短詩形の様相を考へ、日本文化に内在する自然と人間の協生を指摘し、異文化との協調をめざす未達の展望を開く。



講師 有馬朗人氏

国際俳句交流協会会長・元文部大臣および科学技術庁長官・元東大総長・文化勲章受章者  
1930年生まれ。1953年東京大学理学部物理学科卒業。理学博士。ニューヨーク州立大学ストーニーブルック校教授、東京大学理学部教授をへて、1989年東京大学総長、理化学研究所理事長、文部大臣、科学技術庁長官を歴任。現在、武蔵学園長、静岡文化芸術大学理事長、物理学者として世界的に名高く、1978年仁科記念賞、1993年日本学士院賞、2010年文化勲章など受賞多数。山口青耶に師事し、日本を代表する俳人としても活躍。「天為」主宰。

2017年7月5日(水) 14:00~16:30 (受付開始13:00) 愛知県立大学長久手キャンパスL棟(講堂)  
| 募集人数: 400名(先着順) | 参加費無料 | 申込必要 | 募集期間: 2017年6月30日(金) 15:00まで |

主催: 伊藤伸江(愛知県立大学日本文化学部国際文学専攻教授 科学研究費補助研究「24530222中世欧米の享受から見た心象の文学作品の創造と新興集英派文学圏への影響に関する研究」研究代表者)  
共催: 愛知県立大学地域連携センター 後援: 伊豆山本県立芸術文化遺産 登録推進協議会、朝日新聞社、朝日カルチャーセンター、中日新聞社、栄中日文化センター  
※この公開学術講演会は、JRS科研費「P24530222」の助成を受けたいものです。

**申込方法** ※本学学位取得はご遠慮願います。  
●本学地域連携センターウェブサイト(<http://www.bur.aichi-u.ac.jp/renkei/>)にアクセス頂上、「有馬朗人公開学術講演会の特設ページ」より所定の申込メールアドレスに情報を送りください。  
●往復入学金等は本メールに記載名(※のがある)、電話番号、「有馬朗人公開学術講演会 希望」をご記入の上、右記問い合わせへお送りください。

愛知県立大学長久手キャンパス  
〒480-1198 愛知県長久手市沢ヶ谷1522-3  
愛知県立大学 研究支援 地域連携課  
Tel: 0561-76-8843(直通) | Eメール: [renkei@bur.aichi-u.ac.jp](mailto:renkei@bur.aichi-u.ac.jp)

交通アクセス  
●リニエーター「関ヶ原」から徒歩約10分  
●リニエーター「八幡」から徒歩約10分  
●リニエーター「八幡」から徒歩約10分  
●バス「関ヶ原」から徒歩約10分  
●バス「八幡」から徒歩約10分  
●バス「関ヶ原」から徒歩約10分  
●バス「八幡」から徒歩約10分  
●バス「関ヶ原」から徒歩約10分  
●バス「八幡」から徒歩約10分



当日のスケジュール

14…00～14…25 「日本の短詩に込められたもの」 日本文化学部国語国文学科教授 伊藤伸江

14…25～14…30 講師 有馬朗人先生ご紹介

14…30～16…00 有馬朗人先生 学術講演

「西洋の詩と東洋の詩、特に日本の詩と科学と文化の交錯の先に」

16…00～16…10 学術講演質疑応答

司会 日本文化学部国語国文学科准教授 久保蘭愛

司会補助 日本文化学部国語国文学科准教授 本橋裕美

本年七月五日に、有馬朗人先生においでいただき、公開学術講演会を行うという僥倖にめぐまれた。御講演は、卓越した世界文学の知識を元に、比較文学研究の重厚な成果を幅広く読み解かれ、研究者として科学的な視点からも分析を加えられたものであり、また世界各地に赴かれて句作を積み重ねられた経験から、世界各地の俳句の創作活動の広がりと将来を見据えられたものであった。当日、愛知県立大学講堂には、御講演を慕って五百人を越える方々が聞きに来られ、さらにぜひご講演の記録を文字で読みたい、記録を作ってもらいたいと望む声が多く寄せられた。ひるがえって、御講演は、お招きする事業主体となった科研費研究に対しても、和歌から、連歌へ、連歌から俳諧へ、俳句へと移行行く日本の短詩型文学の大きな流れの中で、歌句の持つ技巧と力などをあらためて考えぬこうとする契機と視点を与えてくれた。本科研費研究は、心敬の連歌をテーマとし、成果である『心敬連歌 訳注と研究』（二〇一五・笠間書院、奥田勲聖心女子大学名誉教授との共著）は、平成二八年度文部科学大臣賞を受賞することができた。しかし、またそれゆえに、比較文学の視座から有馬先生が投げかける課題は私にとり大きな難題であり、今後も挑み続けていきたいと考えている。

講演会の記録をここにとどめたく、有馬先生の掲載御許可を得、さらに全体を加筆・整理した上で、掲載するものである。

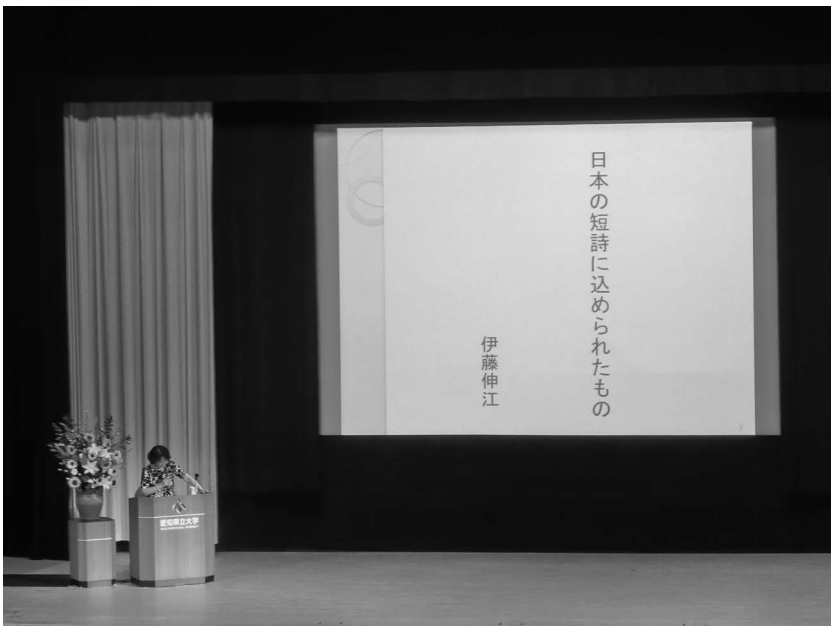
伊藤伸江

(1)日本の短詩にこめられたもの

日本文化学部教員の伊藤でございます。

本日の学術講演会は、日本の短詩型、特に俳句が世界に広く浸透し、世界の文学にたくさんの方の影響を与えている現在、日本を代表する著名な俳人であられる有馬朗人先生をお呼びして、現代俳句が、古典の詩歌から伝え持ってきたその特徴をあらためて考え、ひいては世界の中で、日本の文学、文化の持つ特質を考えてみようという趣旨で開催しております。俳句には、大きな特徴がいくつかありますが、なかでも、非常に短いということ、そして自然を中心に詠むということは、詩型の根幹をなすものです。本日は、こうした二つの特徴を考えることで、世界に広がりつつあるこの日本の文学の特質をとらえます。さらに、俳句の、世界への広がりとの様相をも体感し、自然と人間との共生、異文化との協調の未来へと考えをすすめていきたいと思います。

この学術講演会は、日本学術振興会の科学研究費の助成を受けて行います。日本学術振興会というのは、日本で行われているさまざまな分野の研究をより発展させるために、資金援助などをする機関です。講演会のちらしや、本日のスケジュールの紙にも「科研費」



というマークがついておりますが、これは正確には「科学研究費」という名前です。文学や哲学のような人文文学、法学、経済学といった社会科学、そして自然科学と、すべての分野に研究のために「科学研究費」という補助金が出され、研究機関に属する研究者の研究を外部から支え、日本の学問の発展のための資金となっています。

さらに、日本学術振興会が支援する学術研究の成果は、社会の共通の知的資産となります。それゆえ、科研費を使う研究者側には、どんな研究をしているのかを社会の皆様を知っていただくということも求められています。それをアウトリーチ活動と申します。

今回、有馬先生をお迎えしてのこの講演会は、多くの方々の協力、ご支援で実現したものでありますが、また、科研費のアウトリーチ事業でもあります。これから、科研費研究から得られた成果を少しお話しし、有馬先生のご講演で語られます、世界の中の、日本の文学・文化の特質を共に考えて行きたいと存じます。



俳句は、世界一短い詩型と言われています。

短いゆえに利点は多くあり、誰もがすぐに作れる、記憶に残るといったところからも、世界に広がり、その形式が多くの国で受け入れられています。

短いゆえに、また俳句は鑑賞する人それぞれの自由な解釈が生ま

れやすく、その点で広く受け入れられやすいともいえます。

歴史的に見れば、日本の詩歌は、記紀歌謡には片歌問答などの多くの形があつたものが、万葉集時代には長歌・短歌・片歌問答が一首の形となったと考えられる旋頭歌の三種類となつていき、やがて和歌（短歌）形式が主要な形になっていきます。そして、平安期からは、和歌一首を二人でつくる形式をとつた連歌も盛んになっていき、最小の単位は、和歌一首から連歌の一句、そして同様の形式をとる俳諧の一句へ移ります。さらに、俳諧の発句を、正岡子規があえて俳句と呼び変えて以降、近代俳句の時代となり、そのままの短さで存続していきます。いわば日本の詩の基本の形は、長い歴史の中で短くなつてきているといつてよいでしょう。

しかし、短いということは、本来、言わんとすることを表現するために非常に不利なはずで

す。それでも、連歌においても、俳諧においても、発句には「切字」があるのがよいとされ、歌の半分の長さの中で、内容を完結させる独立性が意識されつづけてきました。独立性については既に平安期、『倭頼髓脳』に連歌の規則として述べられています。<sup>(1)</sup>

次に、連歌といへるものあり。例の歌の半をいふなり。〔なかから〕  
なからがうちに、言ふべき事の心を、いひ果つるなり。

「なからがうちに」「いい果つる」、これが連歌、俳諧、俳句とずつ

と守られていきます。日本においては、表現するのに不利なはずの、短い詩型の基本の枠をこわすことなく、創作がされ続けていたのです。ここでは、短い詩型が、十全に表現しうるために持っている技法を考え、そこから日本の詩の短さを見つめ直してみたいと思います。



まず第一に、日本の詩歌には、伝統的に、一つの和歌に多くの内容を重ねて示す、という傾向があります。新古今和歌集の時代からルール化された本歌取はその最たるものです。

本歌取とは、誰もがあの歌だとすぐわかる有名な古歌の一節を、自分が新たに作る歌にそのまま取り入れ、古歌のイメージを新たな歌に取り込む技法です。すなわち、先んじて作られた優れた歌表現をもとに、そこに新たな表現を付け加えて歌を作っていきます。この時、取り込まれた古歌の表現の長さは、ほぼ一首の半分までがのぞましいとされています。<sup>2)</sup>古歌の表現と新たな歌の表現は、一首の中に、最大限半分が古歌という割合で共存することになります。この時、引用された古歌の一節は、長さは短くとも、古歌全体のイメージを喚起することになります。新たな歌は、一首分の古歌をイメージさせた上に、新しい意味も加えた、三十一文字を越えた意味の広がりを持った歌となるのです。

この本歌取の技法は、一句が和歌の半分の長さである、連歌においても継承され、さらに連歌の発句にも効果的に使われています。例えば、長享二年（一四八八）正月二十二日に、宗祇・肖柏・宗長の三人で張行された『水無瀬三吟百韻』の宗祇の発句があります。宗祇は後鳥羽院の新古今集の歌「見渡せば山もと霞む水無瀬川夕は秋と何思ひけむ」を本歌に使い、発句「雪ながら山本かすむ夕べかな」を詠んでいます。後鳥羽院の歌は、枕草子の「春はあけぼの」の章段で述べられた「秋は夕暮れ（がよい）」という考え方を否定する形で、春の水無瀬の山里の夕暮れ時の光景のすばらしさを述べています。山の峰にはまだ雪の残る初春の水無瀬につどい、眼前の景を「雪ながら」に示し、後鳥羽院の春歌を重ねることで、後鳥羽院の御代に思いを馳せています。<sup>3)</sup>句の背後に後鳥羽院の御代が揺曳するわけです。

このように、発句として独立している一句の中に、歌一首の中のわずか十文字程度（五・七・五の句のほぼ半分です）を入れることで、歌一首を想像させ、鑑賞させる本歌取は、句の長さを伸ばすことなく、内容を広げる独自の手法となっています。しかも、和歌から連歌の発句、俳諧の発句と、詩型が半分になり、引用できる本歌の一節も短くなっても、歌一首を句の背後に想像させる手法であることは変わらず、歌の本歌取よりも、連歌・俳諧の発句の本歌取は、そ

の長さに比して、一段と多くの意味が含まれているということが  
できるのです。

こうした本歌取をさらに大胆にとりいれる手法を芭蕉が試みてい  
ます。歌語から逸脱したような強いイメージの言葉をあえて使い、  
結果的に連歌の発句をいわばそのまま、俳諧の発句に入れている形  
です。

#### 千五百番歌合に、冬歌

世にふるは苦しきものを楨の屋にやすくも過ぐる初時雨かな

(新古今集・冬・二条院讚岐)

同じ頃、信濃に下りて、時雨の発句に

世にふるもさらに時雨のやどりかな

(新撰菟玖波集・発句下・宗祇)

手づから雨のわび笠をはりて

世にふるもさらに宗祇のやどりかな

(虚栗・芭蕉)

宗祇の発句は、新古今集の二条院讚岐の和歌を本歌とし、応仁の乱  
で、地方に避難することを余儀なくされた我が身の境遇から、この  
世の住みにくさを嘆き、そのつらい我が身に時雨までもふりそそぐ  
ので、雨宿りをせざるをえないますますつらく感じています。芭  
蕉は、そんな宗祇の句をそのまま使い、自分の句には「宗祇」とそ  
の名を入れることで、敬愛する先人「宗祇」と、時を隔てても、現

世の苦しさ、はなかさという同じ意識を共有する自分とを、ふたみ  
ちに表現し、この上なく深い親愛の情を示しているのです。



また歌の中に使われている言葉に多くの意味を背負わせること  
で、歌の意味を広げていくという方法もあります。和歌においては、  
はやくから掛詞を使うことで、二重の文脈の橋渡しをし、自然描写  
の表現の中に心情表現を埋め込んできました。それ以外にも、文字  
数を増やすことなく、一語の表現内容を深く多くしていくやり方の  
一つに、感覚表現の重ね合わせ、すなわち共感覚表現と呼ばれるも  
のがあります。共感覚表現は、五感のうちの例えば聴覚でとらえた  
ものを、視覚を表す語句で表現する「黄色い声」などが、わかりや  
すい例としてあげられ、そのイメージの転換によって、強い印象を  
与えうる表現です。

風吹けば蓮の浮き葉に玉こえて涼しくなりぬ日暮らしの声

(金葉集・夏・源俊頼)

一つ目の歌は、十二世紀の歌人源俊頼の歌です。

檜の葉の高き梢に風を聞きていさごに白き月ぞ涼しき

(延文百首・夏月・進子内親王)

次の歌は、十四世紀の京極派歌人、進子内親王の歌です。それぞ  
れ、蓮を吹く風、露の玉、日暮らしの声、また檜の葉を鳴らす風の

音、白い砂をしらじらと照らす月の光、と、多くの聴覚と視覚を刺  
激する景物を並べていますが、俊頼の歌では、「風吹けば…涼しく  
なりぬ」と「涼しくなりぬ日暮らしの声」という二つの文脈が「涼  
しくなりぬ」によって、想起されます。これが進子内親王の歌にな  
りますと、「月ぞ涼しき」と、より直接に光を皮膚感覚で感じる形  
になっています。

はやく藤原俊成にも、次のような歌が見られました。

春の夜は軒端の梅をもる月の光もかをる心地こそすれ

(千載集・春上・藤原俊成)

春の夜に咲く梅の香りにより、その梅を透かせてさしこむ月の光も  
香る、そんな心地を詠んでいます。このような共感覚表現は、詩型  
の短い連歌や俳諧の発句の中でも、他の感覚の表現と重ねあわせら  
れています。<sup>14</sup>

一例として、自然の景物を表現する色あいとして注目される「青  
し」「白し」という言葉を見ましょう。自然の景物の持つ、「青」「緑」  
をも表現します)や「白」の色を表すこれらの言葉は、新古今和歌  
集の時代から、時を隔てて京極派和歌の時代に和歌に詠まれ、連歌  
作者心歌をへて、<sup>15</sup>共感覚表現として、芭蕉の句につながっていきま  
す。心敬の句と芭蕉の句の含意の深さを比較検討する試みは、若き  
日の正岡子規もなしており、この二人の連歌、俳諧作者の求める境

地には近いものがありました。<sup>16</sup>

散らしかね柳に青し秋の風 (芝草句内岩橋・発句・心敬)

心敬は、緑の植物の色を、色なき風に投影し、風をも「青し」と表  
現します。「風が」柳をちらしかねている」と風を擬人化し、物と  
人間との近さ、その同一視も表しています。そして、この延長上に  
芭蕉の「石山の石より白し秋の風」(奥の細道)の句があり、完全  
な共感覚表現として著名なものに「海暮れて鴨の声ほのかに白し」  
(野ざらし紀行)があります。「海暮れて」の句は、夕暮れ時の海  
辺で、波の音はるかに続くうちに、鴨が鳴く声が聞こえる情景で  
す。鴨の声は、色でも表現されることで、秋という季節の夕暮れ時  
の光景を、際立つてくつきりと示すのです。



日本の詩歌がその短さを守りながら、多くの意味を重ねあわせ表  
現を広げていく技法の例を二つみてきました。

本歌取では、作者は古人の作りあげた表現を自己の歌や句の中に  
借り、古歌を凝縮させて自己の詩型に入れ込むことで新たな世界を  
構築しました。共感覚表現では、作者は自己の複数の感覚を重ねあ  
わせて一つの言葉で表現し、伝える内容を複合化し句に強いイメー  
ジを与えました。

加えて、本歌取、共感覚表現共に、句を作る側のみならず、鑑賞



する側も、句に重ねられた意味を感じ取り、共有することが必要になります。

本歌取では、時をはるかに隔てた過去の文化をわかっていることが求められます。時と空間を超えて先人と「共に生きる」ということが必要になるのです。

共感覚では、共有された感覚世界を互いに分かち合うことが求められます。共感覚表現は日本語だけのものではありませんが、他国語に比べて早いうちから詩歌に見られるといえます<sup>①</sup>。やはり、他者との共鳴、共感が多く求められています。このような、作者と鑑賞者の間での知識・感覚の共有の大きさ、作者によりそって鑑賞者が感じていく、さらには、作者のみならず鑑賞者も、歌句を通して、過去の世界とも積極的につながっていくというあり方は、日本の詩歌の見逃せない特徴であろうと思われれます。

また、連歌は、片歌の問答の形式の流れを汲み、平安期からは和歌(短歌)形式を複数人で作り、さらにつないでいく形になっています。連歌の百韻の場は、複数人の参加する「座」となり、俳諧は連歌と同じ形式の「座」を守っていきます。俳諧のその発句からつながってきた俳句の中には、幾重にも他者との共生が根ざしているのです。

ここまで、日本の和歌から連歌、俳諧の発句へと至る、短い詩型

の中での表現方法の工夫と特質を見てまいりましたが、これから、有馬先生のご講演では、俳句からの視点を定められて、自然を表現するというテーマを、世界の詩歌がどう表現したか、そして、日本の詩歌はどうか、ということからお話をなさいます。また俳句の国際的な広がり歴史をお話してくださいます。その道のスタート地点に皆様をお連れしまして、話を終えることにいたします。

## 注

- (1) 引用は新編日本古典文学全集『歌論集』2002・小学館。
- (2) 『詠歌大概』に、「古歌を取りて新歌を詠ずるの事、五句中、三句に及ばば頗る過分にして珍しげなし、二句の上三四字はこれを許す。」とある。引用は1に同じ。
- (3) 長享二年は後鳥羽院の二百五十年忌にあたる。
- (4) 共感覚表現に関しては、京極派歌人について論じた伊原昭『源氏物語の色 いろなきもの世界へ』(二〇一四・笠間書院)、正徹に関して論じた稲田利徳『正徹の研究』(一九七八・笠間書院)、心敬に関して論じた岡見正雄『室町文学の世界』(一九九六・岩波書店)、芭蕉に関して論じた小西甚一『鴨の声ほのかに白し』―芭蕉句分析批評の試み―(『文学』

一九六三・八)等の論がある。また、岩佐美代子『和歌研究 附、雅楽小論』(二〇一五・笠間書院)に俊成の千載集24番歌の指摘がある。

(5) 拙稿「心敬の句表現―「青し」の系譜から―」(『日本文学』二〇一七・七)。

(6) 『筆まかせ』第一編内「古池の吟」(『子規全集』第十卷

(一九七五・講談社))

(7) 注4小西論文が言及する。また川本皓嗣『日本詩歌の伝統

〔七と五の詩学〕』(一九九一・岩波書店)によれば、世界的には聖書・古代ギリシヤ・ローマの叙事詩にも散見し、フランス象徴派の作品を通じてひろく知られるに至った技法という。

(伊藤伸江)

## (2) 有馬先生ご紹介

それでは有馬朗人先生のご紹介に移させていただきます。ここでは、有馬先生のご経歴を、卓越した俳人として歩んでこられた点に着目しながらご紹介したいと思います。

有馬先生は一九三〇年、大阪にお生まれです。小学生の頃からモーターづくり、鉱石ラジオづくりに熱中され、ものづくりの楽し

みに目覚められました。幼少時に脊椎カリエスで闘病され、それを克服されたあとは、浜松一中に進み、中三で終戦を体験され、同じ頃にお父様を亡くされておられます。中学時代に岩波書店の『物理学はいかに創られたか』を読み、理論物理学への関心を強められました。同時に、俳句をよくされるご両親のもとで育たれましたので、俳句への関心も強く持たれ『ホトトギス』に投稿されています。高校は東京の武蔵高校に進学され、その進学が決まれた時の句として、

標なほ芽吹かざれども雲は春

と詠まれています。武蔵高校から東京大学へ進まれ、理論物理学を専攻されます。また、工学部の教授であった山口青邨先生の弟子となり、東大ホトトギス会に入会されます。俳句のみならず、幅広く文学にも傾倒された大学時代となりました。

水中花誰か死ぬかもしれぬ夜も

東大の大学院を卒業後は、原子核研究所の助手となられ、アメリカの大学で研究をされ、卓越した業績をあげ続けられました。業績の一つである「有馬・ヤッケロー理論」ではノーベル賞候補にもあげられておられます。研究に没頭される中、

二兎を追ふほかなし酷寒の水を飲み

という句をつくられています。後に東大に戻り、理学部教授となら

れ、大学紛争時代には総長補佐として、その収拾に奔走されます。総長になられてからは、大学行政の面からも、研究と教育を支えられました。

漱石の脳沈みたる晩夏かな

珈琲の渦を見てゐる寅彦忌

寺田寅彦は随筆家としても有名ですが、物理学者でもありました。

天狼やアインシュタインの世紀果つ

銀杏散る万巻の書の頁より

東大を退官された後も、教育行政の道などで多くの要職を歴任されています。

加えて、有馬先生は、研究で諸外国を訪れ、多くの海外詠を詠み、俳句の世界に新しい境地を開いておられます。例えば、フランス・ギリシャ・ブラジル・インド・中国・ポーランドなどで、次のような鮮やかな句をつくられています。

街あれば高き塔あり鳥帰る

鶏頭や赤き糸繰るアリアドネ

金の靴一つ落ちぬし謝肉祭

冬蠅の住みゐる魔法のランプ買ふ

いづこにも籠ゐる国の天高し

人影のアウシュヴィッツへ行く花野

フランス・ルーアン

ギリシャ・クレタ島

ブラジル

インド

中国

ポーランド

また、日本を詠む美しい作品も、多くつくられています。

草餅を焼く天平の色に焼く

光堂より一筋の雪解水

有馬先生は、はつとさせるような印象豊かな艶やかな句、また穏やかで広大なイメージの句など、折々に多様な句を詠まれます。多くの国に行かれ、幅広い知識を投影して、優れた文学を生み出してこられました。そうした知識も理論も実作の経験も兼ね備えられた有馬先生のこれからの講演は大変素晴らしいものになるでしょう。ご講演をお願いいたします。

(伊藤伸江)

### (3)有馬先生ご講演

皆さんこんにちは。有馬朗人でございます。ただいまは大変詳しく伊藤先生をご紹介いただきました。ありがとうございます。今日はこの愛知県立大学にご招待賜り、「西洋の詩と東洋の詩」という風なお話をさせていただくことを、大変喜んでおります。高島先生ありがとうございます、招待賜りまして。本来なら私は皆さんに物質の根源はどういう風にできているか、物質を潰していくと分子になり、分子をさらに壊すと原子になり、原子をさらに壊すと原子

核になり、原子核をさらに壊すと中性子と陽子になり、それをさらに潰すとクオークという物質になるとい話をしたいところだけれども、まあそれをやったら皆さん間違ひなくはじめから寝てしまわれる。というので、少しは分かりやすい俳句の話をした方がよからうというので、今日は私の専門と全く違うお話をすることでお許しただきたいと思います。先ほどは大変伊藤先生が日本の文学、特に短歌の話を詳しくなさっておられ、その中でどういう特徴があるか、そして俳句がどのようにして生まれてくるか、その辺のお話をしてくださっておりますので、大変話がやりやすいということを、御礼を申し上げます。

私のお話は、どういうポイントがあるのかというと、今からお話したいことの大きな流れは、西洋の詩とは人間中心である、東洋の詩とは自然が中心である、ということが詩の上でも絵の上でも、絵のほうのお話は致しませんけども、絵の上でも、そしてまた実を言くと対称性、自然の対称性あたりにもあらわれてきて、そして東洋と西洋の違いが、もちろん根本的には同じ人間ですから、同じようなことを考えるのだけれどもどことなく違いがある。それは何故か、というふうなお話を致したいと思います。ただし、何故かというところの風土論は今回はあまり時間がないので致しませんけれども、こういう風な俳句を通じてお話を少し、西洋と東洋の違いについて



お話をしてみたいと思います。

まず東洋の詩と西洋の詩の大きな違いの一つを申しますと、西洋には長編叙事詩というのがあります。皆さんはギリシャのホメロスの書いた『オデッセイ』とか『イリアス』なんていうのをお読みになつた方がおられると思う。トロイ戦争なんていう話がそこに入つてくるわけですが、なんと一万二千行以上の長い詩である。それから『アエネイス』というローマの歴史を書いたウエルギリウスの詩も長い。例えば皆さんよくお読みになると思うけどイタリヤのダンテの『神曲』というのはやつぱり、一万四千行以上の詩である。そしてまたもうちょっと新しいですけど、ミルトンの『失樂園』も一万行。それに反して漢詩で長詩というのがある。その漢詩のなかでも短いのと長いのがあるんだけど、長詩と言われているものでせいぜい二百行ぐらいのもので、例えば「長恨歌」という白居易の有名な詩がありますけれども、楊貴妃のことを書いてる、その詩なんかもせいぜい百二十行とか二百行ぐらいの短いものである。日本も『古事記』とかそういう神話があるけども、神話がそういう詩で書かれたものはない。そういう意味で日本や韓国、そして中国には、長編叙事詩がない。そしてまた中国にも韓国にも日本にも、先ほどは歴史などの叙事詩のことについて申しましたけれども、そういう神話についても長い詩はない。長い詩は西洋ですと、

例えば北歐神話のエッダというようなものは長い詩です。そういう長い詩で書かれている神話が東洋にはない。もちろん色々な神話、

『古事記』とか『日本書紀』とかあるけれども、詩にはなっていない。すなわち中国、韓国、日本には、韻文の神話がない。何故だろう。まあ例外がないわけじゃなくてアイヌのユーカラ、これはアイヌの人たちの神話に属するようなお話がずつとある。これは例外的に長いのですが、日本の天照大神だとかそういう神話を詩で書いている長いものがない。何故だろうか。こちらにヨーロッパと東洋の違いが一つあります。もう一つの違いは、これが今日の主題ですけども、自然を詠った叙景詩、自然を詠った叙景詩というのは、これからお話を致しますけれども、中国や日本ですと八世紀に成立します。ところが西洋では十六、七世紀になつてやつと自然を主題にする詩が出てくる。こういうところに大きな違いがあるわけです。それを少し詳しく振り返ってみましょう。詩歌と自然の関係について少し論じてみることに致します。

ギリシャには先ほど申しましたオデッセイの、ホメロスのような詩がありますけれども、自然を歌った詩もないわけではない。サッフォーという詩人がいました。大変美人だったという話があります。そのサッフォーなんかを読みますとちよつと自然がある。ところが、ローマに至りますと、人間が中心になつてしまつて、自然を

歌うことがほとんどなくなってくる。一方中国も古代においては人間を中心に歌うことが多かったけれども、八世紀、王維あるいは同じ頃に李白とか杜甫が生まれますけれども、その時代になりますと、中国ではすでに自然を中心に歌う詩が成立していく。日本でもちよほど同じ頃、万葉の時代に自然詩が成立していきます。なお日本では、中国でも同じことが言えますけども、もちろんヨーロッパと同じように愛情とか心情を歌う、そういう、日本でいうと和歌もたくさんあるし中国でもそういう詩が多いんですけども、でも、この自然を歌う詩が中国、日本、韓国ではずっと続いて発展してきている。抒情詩以外にそういうものが発展してきている。それに比べてヨーロッパでは長い人間中心の詩が流行っていた、というお話を今から具体的にお示ししましょう。そして日本では江戸時代になった頃、俳句というのが盛んにつくられるようになる。まず俳諧連句というものが盛んになります。連句の最初の句、発句というものは自然を歌うことが必要であって、発句では、そしてそれを現代では俳句と呼ぶけれども、発句や俳句では自然が中心になっている、というようなことをお話しておきましょう。そして具体的にヨーロッパの詩を古代から少し見てみます。ギリシャのサッフォー、西暦前七世紀です。

夕星よ

光がもたらす暁が  
散らせしものを

そなたはみなつれ戻す

羊をかえし

山羊をかえし

母のもとに子をつれかえす

こういう風に自然が詠われている。こういう詩も、もちろんヨーロッパでも古くからあつたんだけれども、特にギリシャでもあつたんだけれども、西暦前八十年くらいになりますとローマのカトールスなどが活躍する。それを見るときどういうことになるか。その詩は恋愛が中心になっていきます。

蜜みたやうな　かわいい君の眼に、

ユウエンティスよ、

もし誰かがわたしに　いつまでも

接吻さしてくれるなら、

萬を三十たびまでもくちづけ、

というような恋愛の詩が中心になっている。人間を中心にした詩が非常に強くなっていく。そしてローマ以後西洋では、そういう風に人間の喜怒哀楽、愛や悲しみ、そして神様への賛歌が、この場合の神はもちろん、もともとギリシャの神とかローマの神、そういうの

もあるけども、キリストへの賛歌が詩の中心になっていきます。私は長い間、それはキリスト教がローマの国教になってヨーロッパのそれぞれの国の宗教に、国教になっていたらと考えていたけれども、どうもそうじゃなかった。ということに気が付いたのは三〇年ほど前ですけれども、それ以前から、キリスト教がローマの国教になる以前から、ローマの詩は今お話ししたカトールスの詩のように人間が中心、愛が中心になっている詩が多かった。念のために、いつ頃キリスト教がローマの国教になるかというと、西暦の四世紀の終わり頃、三九二年に初めてキリスト教が国教化するわけで、それまではギリシヤ、ローマ神話が中心であった。にも関わらず、もうすでにローマの詩は人間中心だったということにご注意いただきたいと思えます。何故かということは、私はよく分からないところがあるんですけども、ギリシヤでは多少まだ自然が歌われていた。ローマでは歌われなくなった、ということの一つは、ギリシヤでは哲学や自然科学、数学、ユークリッドの幾何学というのが非常に発展していた。ローマではそれに反して技術が非常に発展しました。ローマとかヨーロッパのいろんなところで、ローマ人がつくったと言われている水道があったり、あるいは風呂場があったり、道路がたぐさんつくられている。「全ての道はローマへ通ずる」という言葉すら使われているくらいに技術が盛んであった。この技術がロー

マで、そしてヨーロッパで発達したことから、人間の力を信じ、人間中心の文化が進んだんではないか。それが詩や絵画にも影響を与えて、人間中心の詩がつけられ、人間中心の絵が多くなったという風に私は考えている、ということをごで申しあげておきましょう。さてそこでヨーロッパから離れて、中国にいつてみましょう。中国の詩と自然について少し見てみますと。中国では古代の歌謡は『詩経』というものに集められています。これには中国春秋時代、西暦前八世紀頃から西暦前五世紀くらいまでの民間の人たちがつくった詩が集められています。何故、『詩経』と言うか、お「経」と「経」がついているか。この「経」がついた理由は孔子がこの『詩経』を大切にして、仁の道を進めていく、儒教の教えを学ぶ上に必要なことは一般民衆の詩を理解しないとイケない。一般民衆の気持ちを理解しなきゃならないというので、一般の民衆が書いた詩を集めた、詩集を『詩経』と名付け、それを五経の中の一つ、『論語』とか何かのように重要な儒教の勉強の本の一つとしてこの『詩経』を認めたことよって、『詩経』という言葉が生まれたわけです。その詩経を読むと、古代の中国の人たちがどんな風な感情を持っていたかということがわかるんです。そしてまた春秋時代に『楚辞』というのがつくられますけれども、楚の王様の子どもであった屈原という人が集めたと言われている『楚辞』、これは中国の戦国時代から前

漢の初期、西暦前五世紀から西暦後一世紀に集められている。これも民衆の詩や、あるいは屈原がつくった詩がたくさん集められている。こういうものを読みますと、中国でも喜怒哀楽がまず中心である。そして自然もところどころに出てくるけれども、それは感情を表現することが中心で、まだ自然を歌うという風な感じにはなっていない。さらに時代が下つていきますと、やっと自然詩が中国で発展していきます。吉川幸次郎先生という中国文学の大家が、京都大学におられました。その人の文章を読んでみますと、「杜甫が人間の心情の美しさを歌う詩人であり、李白が人間の行為の美しさを歌う詩人であるとすれば、王維は主として自然の美しさを歌う詩人である。中国における自然詩の歴史は、そんなに古くはない。」古くはないと言つたつて西暦一世紀とかその辺、もうちよつとあとですけれども、西暦八世紀頃の話になるので、日本から見れば本当に古い時代ですが、まあ中国自体で見るとそんなに古くない。最古の詩である『詩経』、さつきお話ししました。そしてまた『楚辞』、さつき申しました。『楚辞』には、鳥獣草木の名がしばしば見えるけれども、それらは自然を詠ぜんとして自然を詠じたのではない。人事の比喩として、或いは人事をいい出す手がかりとして、使われているにすぎない。専ら自然を詠じた詩、それは四世紀、東晋の世に至つて、はじめてあらわれる。しかしそれらも、自然の美しさを

人間の道理の原泉、典型としてあがめつつ、詠ずるものであつて、謝靈運の山水詩は、その代表であり、陶淵明の詩も、その傾向にある。「陶淵明の詩は皆さんご存知ですね、「田園將に蕪れなんとす」という有名な詩がある。そういうものも自然が歌われているけどもまだ本格的ではなく、やつと杜甫、李白、王維、そのような人々が活躍する八世紀になつて初めて中国で自然詩が成立する。李白を読んでみましょう。そして李白が生まれたのが七〇一年であつたというのを覚えてください。

#### 静夜思

床前看月光 床前月光を見る

疑是地上霜 疑うらくは是れ地上の霜かと

挙頭望山月 頭を挙げて山月を望み

低頭思故郷 頭を低て故郷を思う

「床前月光を見る 疑うらくは是れ地上の霜かと 頭を挙げて山月を望み」ここまでではまさに自然が歌われている。ただ李白という人は、先ほど吉川先生がこう言つた、「李白は人間の行為の美しさを歌う詩人である」と言われたところは最後であつて、「頭を低て故郷を思う」と言つたところにあるわけです。自然を歌いながらも、最後には故郷を思うという人間の美しさを歌っている。でも自然が全面的に出てきたことにご注意ください。杜甫はそれから十年くら



い経って生まれ、七十二年と、李白から見ますと十一年後輩です。

七十二年に生まれた人。

江碧鳥愈白 江碧にして鳥は愈愈白く

山青花欲燃 山青くして花燃えんと欲す

今春看又過 今春看く又過ぐ

何日是帰年 何れの日か是れ帰年ならん

「江碧にして鳥は愈愈白く 山青くして花燃えんと欲す」まさに自然ですよ。江というのは揚子江、長江のことを言います。江と言えば長江。揚子江と言うのは、長江が南京くらいから、上海あたりを揚子江と言う。その長江が碧い。そして鳥はいよいよ白い。山は青くして花が今盛んに萌えようとしている。なんとという実に素晴らしい自然詠。しかし最後に「今春看く又過ぐ 何れの日か是れ帰年ならん」というところに杜甫らしいところがあるわけです。杜甫が人間の心情の美しさを歌う詩人であると言われたところがこの最後のところ、帰年というのはどういう意味かというと、自分は故郷にいつ帰れるのであろうか、故郷に帰る年が帰年、杜甫は長い間内乱のためにあちらこちらを家族を連れて流離しておりました。流れ流れていました。したがっていつ故郷に帰れるだろうかというようなことを、気持ちにいつも持っていた。そういう人である。王維、生まれたのが七〇一年、李白と全く同じ。

鹿柴

空山不見人 空山人を見ず

但聞人語響 但だ聞く人語の響き

返景入深林 返景深林に入り

復照青苔上 復た照らす青苔の上

「空山人を見ず 但だ聞く人語の響き 返景深林に入り 復た照らす青苔の上」。返景というのは夕陽、夕陽が深い林の中に差し込んで、そしてまた青い苔の上を照らしている。ここに人は単なる動物と同じように、自然の一つに過ぎなくて、その人が悲しいとか嬉しとかそういうことを一切言わず、人間の声も、動物の声や鳥の声と同じように「但だ聞く人語の響き」という風に自然だけで歌われていることにご注意ください。これが、吉川幸次郎先生が、王維をして中国の自然詩の成立者、確立、完全につくった人とした理由です。しかしそれにしても、李白にしても杜甫にしても同じ頃の人が、自然を歌うようになったことをご注意ください。驚くべきことは、先ほど李白が七〇一年に生まれたことを覚えてくださいねと申しあげた、そして十一歳下に杜甫がいて、同じ年に王維がいた。世界の三大の詩人が、三人の大詩人がほとんど同じ時に生まれ、それぞれ皆自然に大きな関心を持って自然詩を確立していったことにご注意ください。中国がこういう風に自然詩を確立した、それじゃあ日本

はどうだろうか。

ここで驚くことが起こる。万葉集は、五世紀から八世紀の当時の日本人の作った長歌、長い歌、旋頭歌、五七七七七と並んでいく旋頭歌、そして五七七七七という今は短歌と言われているそういう詩を集めた、これが万葉集です。

旋頭歌というのは五七七七じゃなくて五七七七七。もう今作る人はほとんどいなくなつた。で、先ほど伊藤先生から、連歌のお話をお聞きになつたと思うけれども、連歌のことを、よく、旋頭歌から始まる「新治・筑波の道」という風に言う人がいる。なぜかという、ヤマトタケルノミコトが熱田神宮辺りからずうつと東国の方に行つて焼津で、賊軍が周りの草に火を点けて、ヤマトタケルを焼き殺そうとした時に天叢雲剣で草を刈つて逆に火を点けて賊軍を退治する。そういうことから草薙剣になる。そのあと、オトタチバナヒメを連れて、千葉房総半島の方へ渡ろうとするときに、大変な嵐があつて、オトタチバナヒメが自らを身投げて、海の神様に捧げて、ヤマトタケルを救う。そしてヤマトタケルが茨城県に行つて、新治・筑波を平定して、それから今度は栃木県を通り、群馬県を通り、たぶん埼玉県の秩父辺りを通つて甲府の近くまで行つた。で、甲府の近くの酒折宮に着く。そこに着くやいなや、「にひばりつくばを過ぎて幾夜か寝つる」とこう言われるわけです。「にひばり」

は四だけどまあ五と思つて下さい。「にひばり」「つくばを過ぎて」七、「幾夜か寝つる」七、五七七の質問をする。そのころの御火焼の翁が、火を点けたり消したりして歩いてるお供が、インテリなんです。ただちに「日々並べて夜には九夜日には十日をと答えた。

驚くべきインテリの御火焼の翁がいたもんですね。さて、これを旋頭歌と言います。五七七七七。一つの旋頭歌を、初めの五七七をヤマトタケルが、後の五七七を御火焼翁が付けた。二人で一つの詩を作つたつていうんで、連歌を「新治・筑波の道」というわけです。「にひばりつくばを過ぎて幾夜か寝つる」「日々並べて夜には九夜日には十日を」と答えられた。こういう風な伝統がある。

この旋頭歌はほとんどその後作る人がなくなつてしまいましたけれども、短歌はたくさんの方が、今でも作っています。その中で驚くべきことは、柿本人麻呂、山部赤人、ほとんど同じ、先ほどの八世紀のはじめ、すなわち、七〇八年とか七一〇年とか、そのころに、すなわち、王維や杜甫や李白と同じところに活躍した、その二人が、柿本人麻呂 東がしの野にかぎろひの立つ見えてかへり見すれば月かたぶきぬ

山部赤人 ぬばたまの夜のふけゆけば久木生ふる清き川原に千鳥しば鳴く

どちらにも人間がどうしたこうしたと全くなくて、自然の美しさだ

けを詠っているじゃないですか。

すなわち日本では、ちょうど李白や杜甫や王維が活躍したところに、柿本人麻呂、山部赤人という二大詩人が出て、日本でも自然詩を確立した。叙景詩を確立したわけです。こういうところに、日本と中国の詩の、ひとつの特徴があることにご注意ください。

もちろん万葉集でもその後も抒情的な短歌がたくさんあります。叙景詩的なものもありながら、抒情詩が非常に多い、でも叙景詩的なもの、自然を詠うものも非常に多いということが、万葉・古今・新古今等々、日本の文化の、日本の和歌の特徴であったということ強調しておきましょう。抒情詩的なものが非常に多くなっている。そういうことも注意しておかなければいけませんけれども、そういう点で、抒情的なもの、恋愛とか人生観などを詠うのはヨーロッパだけでなく、日本でも中国でもそうだったけど、でもね、叙景的なものがずうっと伝統的に日本では作られてきた。

で、先ほどすでにお話があったので省略いたしますが、和歌とともに連歌も発展してきます。で、その連歌が、非常に、特に室町時代に流行するんですが、その連歌が、殿上人、お公家たち、そういう人々がたくさん作っていて、なかなか一般民衆がとつきにくい上品なものであった。しかしながらそれが、一般民衆の間で作られるようになって、一般民衆は諧謔、遊び心を入れたくなって冗談を入

れたりする。そうして俳諧というものが出てくる。そして俳諧で連歌をつくるので、俳諧連句という風に呼ぶようになります。

俳諧は諧謔。しかしながらその発句は、自然が詠われることがだいたい常識になっていた。そして例を申しますと、

五月雨をあつめて早し最上川 芭蕉

閑さや岩にしみ入る蟬の声

という風に、これも発句の最初ですけれども、「五月雨」とか「蟬の声」が入っている。

四五人に月落ちかゝるをどりかな 蕪村

白梅に明くる夜ばかりとなりにけり

と、こういう風に、発句には、必ず季語というものが入って、自然を詠うんだ、ということが、もう俳諧連句のところから行われるようになります。で、俳諧連句のあまりにもジョークが激しすぎて下落したところに芭蕉が出てきて、そして中国の漢詩を読んだり万葉集を勉強して、俳諧連句の革命を起こして、蕉風の、すなわち芭蕉風の芸術的な俳諧連句を作るようになる。というのが芭蕉の偉さであります。そのような芭蕉が文学性を高めていく一つの契機がこの名古屋で、名古屋の俳人たちと一緒に連句を巻いたところから始まったという事を申し上げておきましょう。こうやって、俳諧連句の最初の発句には自然が詠われる。もちろん連句そのものの中にも

多く自然が詠われることにご注意ください。

さてもう少しまた西洋に戻って、西洋では、詩において自然が発見されるのはいつだろうかというを見てみることにします。西洋の詩における自然の美の発見は、西洋の絵画での風景画の登場と同じころ、すなわち一七世紀以降、特にロマン派登場のころと思われまふ。ロマン派は色んな詩人がいますが、ロマン派で代表的だと考えるのは、イギリスではワーズワースである。一八世紀の人。しかしそれでも、西洋の詩は今でも人間中心です。

なぜこの一七世紀ごろにわかには、西洋で、絵でも風景画が出てくるようになる。あるいは、詩でも、詩の中に自然が入ってくるようになる。どうしてだろうか、ということを考えていくのが面白いこととあります。で、私の考えを一つ申しましよう。

ギリシャの文化のうち、自然科学・数学は、実はローマには十分に伝わっていなかった。で、その哲学とか自然科学とか数学は、主にイスラムによって継承されて発展される。ですから九世紀十世紀ごろは、ヨーロッパよりも、科学や哲学や数学は、イスラムの人々が発展させていた。そういうことにヨーロッパの人が気が付くのが一、二世紀ごろであると考えられます。で、そのころスペインは、イスラム人が占領していました。アルハンブラという美しいお城がスペインのグラナダにありますけれども、このお城はイスラム人が

作った。シシリー島にも、イスラム人の帝国がありました。シシリー島というのは、イタリアの南の方にある島です。そこで、ヨーロッパの人々、そのころのローマの人、フランス人とかドイツ人とかそういう人々が、スペインやシシリー島に来て、イスラムの文化を学んで、そして改めて、イスラム文化の中で活躍しているユークリッド幾何学とか、あるいは自然科学、そういうものを勉強したうえで、イスラムの文化が伝えてくれたギリシャの偉大さっていうものが素晴らしいものだっていうことを知るわけです。すなわちイスラムを通じて、ギリシャからローマへ直接ではなくてイスラムを通じて、あらためて、ヨーロッパの人がギリシャの偉大さを知ったというの一、二世紀です。で、みなさんがお習いになる、日本だけじゃなくてヨーロッパでもアメリカでも見ている、ルネッサンスというとなんとなく、いきなりヨーロッパの人がギリシャ・ローマの文化の偉大さに気が付くと、こういうんだけど、それは嘘だそうです。これは伊東俊太郎先生という私の尊敬する同じ年の学者がいて、その伊東俊太郎先生が『近代科学の源流』等々で、シシリー島やスペインでどういう風に、ヨーロッパの人々が勉強して、ギリシャの偉大さを知り、イスラム科学、哲学の素晴らしさを改めて知ったか、ということを詳しく書いていて、近代科学の源流は、もちろんおおもとはギリシャにあつても、源流はイスラムにある、と

説いておられる。わたしはこの伊東先生のおっしゃる通りだと思つて、その話をここでお伝えしたんですが、これを私は少し、詩に應用してみようと思ひます。せつかく、伊東俊太郎さんの本を一生懸命読んだんだから、読んだだけじゃつまらないんで應用してみようと思ひます。

ルネッサンスが起りますと十六世紀、ガリレオ（一五六四～一六四二）とかコペルニクス（一四七三～一五四三）が出てくる。そしてみなさんのよく知っている慣性の法則であるとか、落体は重さによらず同じスピードで落ちるとかガリレオが発見する。その前に、コペルニクスが天動説を言い出す。ガリレオがそれを信じる。ニュートン（一六四二～一七二七）が、ニュートン物理学を建設する。そして、スウェーデンのリンネ（一七〇七～一七七八）が一生懸命植物を分類して、植物の分類学を發展させます。こういうことがヨーロッパの十六、七、八世紀に非常に發展します。詩人や絵描きも、たとえばレオナルド・ダ・ヴィンチ（一四五二～一五一九）なんかは絵を描きながら、幾何学もやって、自然の美しさをあらためて考えなおす。同じように詩人たちも見ていて、自然の美しさにびつくり仰天し、ニュートンのように、光が七色あるなんという発見に対して驚くわけです。

たとえばジェームス・トムソン（一七〇〇～一七四八）という詩

人が十八世紀にいますが、春夏秋冬の『四季』という詩を書いた。その中の「春」を読むと、

ほら、崇高なニュートンよ、

霞み行く雲が、夕日を受け、プリズムとなつており、

知識人の目には、

白くみえる光の実体として君が明らかにした、

七色模様と見て取ることができぬ。

あの虹というのが七色に見えるのは、ニュートンがプリズムで研究して発見したことを自然が雲をプリズムにしてやつてゐるんだ、というふうなことを初めて知つてびつくりするわけです。虹というものがどういふものかというのはニュートンがその理屈を発見してくれたんだ、こういう風にして、虹を見、自然科学の美しさをジェームス・トムソンが知るといふわけで、そういう風に詩人たちが盛んに自然科学者を称えながら、自然の美しさを信じ始めたわけです。

それからもう一つ、申し上げておくことがあります。我々山を見ると尊敬する。富士山を見ると素晴らしいと思う。こういう気持ちにはヨーロッパではなかった、と言うと驚かれると思うけれども、なかった。ローマではなかった。ドイツでもなかった。イタリーでもなかった。現に、ごく最近までトーマス・マンが『魔の山』なんていう小説を書いていた。魔の山。

いっぽう、自然を愛し尊敬する念は東洋では非常に早かった。まず第一に、中国では五岳という、泰山とかそういう山の、五岳があります、それがみんな大切にされていた。漢の皇帝や、秦の皇帝が、その泰山に行って、封禪の儀を行う、すなわち王様になる、皇帝になる儀式を行う。一番早くにやったのが、西暦前二一九年、秦の始皇帝が、初めて泰山に登って、そこで、自分はこれから皇帝になりますということを山の神様にお祈りした。こういうことがあるので、西暦前二〇〇年ごろからすでに、中国では明らかに山を、非常に尊んでいた。

日本ではどうだったかって言うと、山部赤人の、

#### 長歌

天地の 分れし時ゆ 神さびて 高く貴き 駿河なる 富士の  
高嶺を 天の原 振り放け見れば 渡る日の 影も隠らひ 照  
る月の 光も見えず 白雲も い行きはばかり 時じくそ 雪  
は降りける 語り継ぎ 言い継ぎ 行かむ 富士の高嶺は

#### 反歌

田兒の浦ゆうち出でてみれば真白にそ不尽の高嶺に雪は降りけ  
る

この反歌はみなさん、百人一首でご存知だと思います。こういう長歌、このなかで「天地の 分れし時ゆ 神さびて 高く貴き」富士

山をすでに、「神さびて 高く貴き」と敬ってる。これは先ほどの中国の、泰山に行って、王様になろう、皇帝になろうという風に、泰山を大切にしてお祈りをするのと同じ考えで、日本でも富士山は自然で崇高なものという考えが八世紀にはきちっと成り立っていた。いっぽう西洋では、山は魔の棲むところ、山賊の出るところとして恐れられていた。グリムの童話なんかを読むと、よく山の中におばあさんがいて怖かったりする話がたくさんある。ですから、当時のイタリア人やフランス人はアルプスは怖いところだった。アルプスは怖い。あそこは山賊がいたり、怖いところである、という風に思われていた。

それが十八世紀のワーズワースやその友達のコールリッジのロマン主義によって変わってまいります。コールリッジは、そのころの団体旅行で、イタリアからアルプスに行くことがあって、そのころから団体旅行が始まったようですが、アルプスに行って、アルプスの山は、Sublime（荘厳なり）と言った。「荘厳」という言葉は、それまでは、教会や、あるいはローマの神殿、そういうものを見て、Sublimeとヨーロッパの人は言っていたのだけれど、このコールリッジが初めて自然に向かってSublimeだと言ったのがたぶん、山は崇高なりと言った初めてだろうと私は考えますし、そう言われています。

こうして西洋でも、自然が詩の対象となりました。同じころ、特に、もう一つの理由は、たとえばベルギーとか、あるいはオランダの人々が東洋の方に船を出して商業を始めて、お金持ちになる。その商業でお金持ちになった人々が、それまではヨーロッパでは、自分のうちの人々、家族の絵を描く。たとえば、ヨーロッパに行かると特に、アムステルダム辺りの、イタリーでもそうですが、美術館に行くと、王様の絵やお姫様の絵とかそういうのをたくさんご覧になると思います。肖像画が非常に盛んであった。あるいは、ギリシャ神話の神様の絵とか、そういうのが大変多くあったのに、オランダの商人たちがお金持ちになって、自分のうちの家族の絵を描いてもらってもしょうがないや、といって自然の絵を描いてもらうようになる。ブリュッセル（一五二五頃〜一五六九）だとか、そういう人が自然の絵を描いて、それを家庭に飾るようになる。というわけで、やはり一六、七、八世紀に、にわかにヨーロッパでも自然を描く絵が、特にオランダ、ベルギーで始まっている。

そして皆さんは、今はヨーロッパの方が自然画を描くと思われるようになる。たとえば一五〇年前に生まれた夏目漱石がヨーロッパに行つてびつくりしたのはターナー（一七七五〜一八五二）の絵。ターナーの自然絵が素晴らしいなんて言ってるけれども、ターナーの自然の絵なんてのは、非常に新しいものであって、日本とか中国

はもつと早くから自然画を描いてたということに、ご注意ください。ヨーロッパの自然画は非常に新しいものであります。

で、そのワーズワースの「虹」という題、これから自然の詩を書いているな、ということはお分かりになると思いますが、ただ、よく読むと、

私の心は躍る、大空に

虹がかかるのを見たときに。

幼い頃もそうだった、

大人になった今もそうなのだ、

年老いたときでもそうありたい、

でなければ、生きていく意味はない！

子供は大人の父親なのだ。

願わくば、私のこれからの一日一日が、

自然への畏敬の念によつて貫かれんことを！

自然を大切にしているように見えるけども、結局は自分の心を詠つてる。だからヨーロッパの人は自然を詠いながらも人間を出しているところがいまだに続いている。

で、もちろん今、ヨーロッパだつて革命が起こって、その後自然だけで詠う人が出てくるということが分かりますけれども、いずれにしてもヨーロッパは自然を詠いながらも、人間を中心にするとい

う習慣が残ってるよ、ということにご注意ください。

さて、明治の日本ではどうだったでしょう。ここで正岡子規に  
関して、これも一五〇年前に生まれた、正岡子規が生まれたのは明  
治維新の一つ前の年ですから明治元年が一歳、ですから今年は明治  
一五〇年なので、正岡子規、夏目漱石にとって、生誕一五〇年にな  
るわけです。

そこで漱石っていう名前どうして使っているかわかりですか。

漱石っていう意味？「石でもって口を漱ぐ」そういう詩が中国  
にあるんですね。水で漱ぐのを間違えて石で漱いだっていう詩が  
あって、それを、正岡子規が使った。それを漱石がもらって、漱石つ  
て名前を付けた。というくらい、漱石と子規は仲が良かった。で、  
正岡子規についてわたしは特に、割に正岡子規の研究者たちは、割  
にじゃない、ほとんど言わないことに注意をしたいと思います。

正岡子規が弱冠二十五歳で革命を起こし、俳句は短詩であり主と  
して自然を詠う叙景詩であるという認識を持ったことを強調したい  
のです。その明治の初めのころ、坪内逍遙、これはシェイクスピア  
を初めて訳した人ですが、坪内逍遙は日本の歌舞伎なんかダメだ  
よって。ちょうどそのころ河竹新七という歌舞伎を書いてた人がい  
て、困っちゃって、黙阿弥っていう、黙って作るっていう黙阿弥っ  
ていう名前を作って、歌舞伎を書いたっていう話がありますけれど

も、ともかく徹底的に日本の文化はダメだって言います。この人も、  
東大で経済の勉強をした、その頃法学部に政治経済学科があつてそ  
こで経済学を勉強した。そのころ、東大にはチェンバレンというイ  
ギリス生まれでフランスで勉強して日本に来た、フランス語、英  
語、日本語が自由自在だった人がいて、その人が日本の詩は弱い、  
日本の詩は想像性がない、イマジネーションがないと散々悪口を  
言っていた。そういう時代であつて坪内逍遙は、「我国の短歌、長  
歌の類ひは、所謂ポエトリーと比ぶる」このポエトリーは西洋の詩、  
「ポエトリーと比ぶる時はきはめて単純なるものなるから、僅  
に一時の感情をばいひのべたるに止まるものにて、彼の述懐の  
歌若しくは哀悼の歌に似たり。」

「要するに、ポエトリーは我國の詩歌に似たるよりも、むしろ  
小説に似たるものにて、専ら人世の情態をば写しいだすを主と  
するものなり。我が短歌、長歌のたぐひは、いはゆる未開の世  
の詩歌といふべく決して文化の発揚せる現世の詩歌といふべか  
らず。」

ここまで言わなくたっていいですよ。日本人の描くのは要する  
に未開な野蛮人の描くものである。西洋はもつと長い詩を書いて、  
人生を書くんだと言っています。

「総じて文化発達して人智幾階か進むにいたれば人情もまた変



遷していくらか複雑とならざるべからず。いにしへの人は質朴にて、其情合も単純なるから、僅かに三十一文字もて其胸懷を吐たりしかど、けふ此頃の人情をばわづかに数十の言語をもて述べ尽すべうもあらざるなり。よしや感情のみは数十字もていひ尽すことを得たればとて、他の情態を写し得ざれば、いはゆる完全の詩歌にあらねば、彼の泰西の詩歌と共に美術壇上に立ち難かるべし。」

要するに日本の短歌や俳句はダメだよと、そんなものは西洋の詩に比べたら赤ん坊が作るような幼稚なものだよって、ここまで言わなくたっていいですよ。こんちくしょーと思う。

弱冠二五歳の正岡子規。正岡子規は東大で英語は割によくできたと思う。ドイツ語はどうもできなかったらしい。ドイツ語で西洋史の講義があつただけけれども、それで落第をします。二四歳の時に。こんなので落第をさせるんだつたら私東京大辞めたつて、二五歳の時に東大を辞めることに決めるんです。その直前。辞める直前に早稲田大学の前身ができるころで早稲田文学という雑誌がある。そこに弱冠二五歳ですよ。弱冠二五歳の子規がこう言います。

「天下の事物之を分ちて二とす自然と人事是れなり。自然とは人工を用ひずして生成存在する事物を謂い、人事とは人間の作用を以て作為し思考する事物を謂う。随つて詩家が取りて以て

吟詠の材料となすべきもの亦此二者の外に出でず。而して欧米諸国の詩歌は主として人事を叙し、和漢二国の詩歌は主として自然を叙す。」

私はこの正岡子規の尻馬に乗つて、「西洋の詩は人事、日本と中国の詩は自然を歌う」と。こう言つたのは正岡子規の尻馬に乗つただけの話です。

「人事を叙する者は錯雑混乱するが為に長編の詩歌と成り易く、自然を叙する者は簡單純粹なるが為に短篇の詩歌を生じ易し。是に於て欧米に心酔する者は即ち云ふ、日本の詩歌には妙編大作無しと。知らず妙編大作は果して長編の文字に在るか。人間の嗜好、美術の趣味は固より一個人の判断を以て正否を決すべきにあらず、はた絶対的に善悪美醜を区別し得べきものならざるを以て西詩の複雑と国詩の簡潔は両立して不可なかるべし。何ぞ長編を尊で短編を陋むの理あらんや。何ぞ叙事を重んじて叙景を軽んずるの理あらんや。」

二五歳でここまでよく言つたと思ひます。当時の人は言わなかつた。当時の研究者、学者は全く言わなかつた。むしろ日本の悪口ばかり言つてた時に、ここまで理解したことに感心するんですよ。同時に、これをもつて国粹主義者と思わないでください。そこが正岡子規の偉さ。ちゃんとここに「西詩の複雑と国詩の簡潔は両立して

「不可なかるべし」。両方がいいじゃないかって言ってる。これはやっぱり偉いんですよ。で、正岡子規の本名は昇。それを「ノポール」と呼んで、野球が好きだった。こういうことに気が付くもとは、実はスベンサーという外国人の文学論を読んで、ここまで考えをまとめたようなので、そういう意味で非常に西洋のことを、ドイツ語はまずかったかもしれないが、西洋の本を英語でよく読んでたらしい。そしてこういうふうに関方に対してフエアな人であった。西洋の良さも良く理解し、東洋の良さも理解した人だっただけにご注意ください。

そして事実、正岡子規は写生術というのを導入する。文学に写生を入れるっていうことを言いだすわけ。特に俳句にまず写生を入れる。それは、そのころあまりにもマンネリズムに陥っていた江戸俳諧を改革するには、写生をして蕪村に戻れとか、あるいは万葉に戻れというふうに関方の良さを言い出す。自然を描くには写生がいるんだって。この写生術を、今勉強し始めて、もう一回見直してるんですけれど、日本にだって、伊藤若冲ってすごい絵師がいたのに、なぜ若冲の写生術と言わないんだと思うんだけど。ヨーロッパへ行つて、フランスの絵をかくことを学んできて、そのフランス回り、イタリーやフランス回りで、写生術が絵を描くうえで重要だということを書いてきた絵描きさんたちと話をすると、西洋の写

生術を日本に導入した。これ不思議なんです。どうして日本の写生術にしなかったのかって分からなくて。今、日本と中国の写生をもう一回勉強し直してるところですけども。いずれにしても、その西洋の写生術を日本に持ち込んだ。でそのことによって、短歌俳句がもう一度復活します。写生して自然の美しさを移すことに努力することによって俳句や短歌が新しくなる。正岡子規およびその弟子の伊藤左千夫、斎藤茂吉など、いろんな歌人がいますね。そういう人がみんな写生を始めるのは、この子規のこの写生術の導入から。

で、小説も、人間中心の小説を書いてた人はたくさんいる。「金色夜叉」(尾崎紅葉 明治三〇年)なんてのがあるんだけど、それに対して、正岡子規は写生の重要さを指摘した。その影響を一番受けたのは夏目漱石。で夏目漱石は『坊ちゃん』(明治三九)にしても『吾輩は猫である』(明治三八・三九)にしても全部、写生術に基づいて書いた。その写生術で、小説にも革命を起こしていくわけです。そういう革命をしたのが正岡子規であったわけです。それを応用して、文学で大成功したのが夏目漱石。『吾輩は猫である』にしても非常に細かく写生をしてる。こういうことで、写生に基づいた文学を進めていく。これはもちろん、高浜虚子の役割もあるわけで、正岡子規とその弟子の高浜虚子が写生の重要性をさかんに主張した。まあ、それにしても、私は驚くべきことはたった二、三歳で、

しかも西洋崇拜が当然たる勢いで日本の中に押し寄せている、ほとんどの文化人が、東大の総長を始めみんなが、さかんに西洋ばっかり礼拝している時に、若干二五歳の子規が西洋の良さを認めながらも同時に、日本や中国の、韓国の詩のよさも認めた。日本の短歌俳句が自然中心であり、叙景的であるという特徴への認識が非常にはつきり主張されたことに驚くわけです。

これと全く同じような時期があります。日本の敗戦後、私がちょうど浜松の中学の三年のころ、敗戦になる。その直後にどういことが起こったか。例えば小野十三郎という詩人は大阪を中心にした詩人、私はこの人の詩は好きなんだけれども言うことは気に入らない。石川啄木みたいな甘ったるい五七の魔を使うな、五七の魔を否定せよって言って、五七五七七のあいう韻律を徹底的にたたいたのは小野さんです。そしてまた京都大学の大教授。フランス文学の大家であった桑原武夫さんが、ちょうど終戦の翌年です。昭和でいうと二十一年か。私がちょうど中学で四年生の時、旧制だから中学生は四年五年まであるんだけど、四年生の時に桑原武夫が、俳句は第二芸術である、あんなものはやめちまえと言います。

人生そのものが近代化しつつある以上、いまの現実的的人生は俳句には入り得ない

かかる第二芸術は、江戸音曲と同様、教育からは縮出すべきで

ある

芭蕉が今日なおも尊重されていることの中に封建性、世界的、隠遁的な風雅の道とのつながりがある

こんなものは民主主義には邪魔だ。そう言った。坪内逍遙の言っていることほとんど同じじゃないですか、ねえ。だからね、日本は何か負け戦になるとこういう風に言い出すんですよ。これが一つ問題で、私は、日本がこれからまた大変な時期が来ようと、日本の文学、東洋の文学の良さは、日本の文化、東洋の文化の良さは、守っていくべきだと思います。

さて、あと三〇分ぐらいあると思いますけれども。その間に、この俳句がどういふうにヨーロッパにあるいはアフリカにインドに、そういう日本以外に広がっていったか、というお話し的一片をいたします。

まず、明治になって、日本に色々な人々がヨーロッパから来ます。特にフランスから来たポール・ルイ・クーシユ。これは二、三週間：せいぜい一月しかいなかったと思うんだけど、日本の俳句の面白さに理解を示して、フランスでも俳諧運動をはじめた。こういう人がすでにいたわけです。こういうフランスのポール・ルイ・クーシユなどがフランスで一七シラブルス、五七五というのを母音の数が一七あると解釈して一七シラブルスで短い詩を書き始める。

で、それを見て虚子が、昭和で一年にヨーロッパに行くんですが、このフランスにも行きイギリスにも行き、そこで一七シラブルスのことを言っています。特にフランスで、一七シラブルスでフランス語で俳句を作っていた、ジュリアン・ヴォカンスと話をして。「ヴォカンスさんよ。外国の人が、日本語以外の人が俳句のような短い詩を書くことはいいことだけれども、短いということで我慢なさい。無理やり一七シラブルスにしなさんな。」

なぜ一七シラブルスを虚子が否定したかって、そこに書いてないんだけど、私もこのところを読んで漢俳という中国の詩に当てはめてみました。一七の漢字を並べてかんばい：飲む乾杯じゃないですよ。漢字の俳句。漢俳というのがこの二、三〇年、中国で作られている。その漢俳は一七の漢字から作られています。一七も漢字が並ぶとどういうことになるか。一つの字が山とか私とか、城とか、みんな意味がある。だから一七も漢字を並べると、ものすごくたくさん意味がならんじまう。言い過ぎちゃう。同じように一七シラブルスの詩も、例えばbookは一字ですね。一つの言葉だけど一シラブル。だから一シラブルだどいたい一単語ぐらいに対応する。一ワードぐらいになつてしまうんで、一七シラブルズも並べたらものすごく長い詩になつちまう。だから、私は極端に言えば、中国の人には七字くらいでいいじゃないかと言っています。現に、五言絶句

句というのがありますね。「千里鶯啼て」って有名な詩が、皆さんご存知だと思います。「翠紅に映ず」ああいう詩は七言絶句。先程述べた杜甫の「江碧にして」は五言絶句。五字ならべて四行。二十字あれば何も漢俳なんて作らなくたって、漢詩の五言絶句をつくればいいじゃないのって。それをわざわざ漢俳なんて言わないで。いかに乾杯が好きで国民といえどもね。「カンバイ」って言わなくたっていいじゃないかって言うんですけれどね。虚子先生はまさにそれを言って、そんな長い詩：一七シラブルスみたいに長くしなくてもいいよって言われたんだと思う。だから私はよく、ヨーロッパの人にも言うんだけど、「三単語、四単語、三単語ぐらい並べればいいよ。一七シラブルスにこだわりなさんな。」と言います。虚子先生は、しかしながら季題：季語を入れなさい、自然が重要なんだよってはっきり言われた。それは虚子先生の偉さだと思って、現在西洋で盛んに俳句が作られているような時代に、改めて虚子の言ったことを思い出して、皆さんにお伝えしてるわけです。

アメリカではエズラ・パウンドという人がいました。一九二七年イギリスに移って：アメリカからイギリスに移民して、イギリスで『The Waste Land』（荒地）という詩集を出してノーベル文学賞をもらった、T・S・エリオットという詩人の、先生です。そのエズラ・パウンドが戦前、

落花枝に帰ると見れば胡蝶かな

という俳句を英訳したのを見てびっくり仰天する。たったこれだけで、詩になってるじゃないかと、びっくり仰天します。そして短い詩を作ろうって、印象を大切に詩を作ろうと云って、イマジズムという方法を起こします。イマジズムは簡潔明確なイメージを第一にする詩法。というわけでパウンドは現に二行詩を作ります。

亡霊群集の中にあるさまざま顔の

花弁濡れた黒い枝の上の。

という短い——先ほど申しましたようにヨーロッパの人は長い詩を書くんだけど、こういう短い二行の短詩を発表するということがアメリカに俳句というものを宣伝してくれました。

で、その後戦後になりますとブライスさんという人が来て、学習院で教えたりして、俳句を英語で詳しく解説する。それからドナルド・キーンさんが、『奥の細道』などを宣伝してくれる。そういうことがあって、非常に日本の俳句というものが世界に知られるようになってきます。特にドナルド・キーンは、日本文学における日記、『奥の細道』などの日記の重要性を指摘してくれました。日本では日記的な文学が非常に盛んで素晴らしい。特に『奥の細道』は素晴らしいんだって云って『奥の細道』の翻訳をして紹介してくれまう。こういうことで、戦後、非常にヨーロッパやアメリカで俳句が盛ん

になっている。アメリカでは、一九六〇年から七五年ごろベトナム戦争とかそういうものがあって騒然たる問題が若者の間で起こっていた。その少し前一九五六年ごろ、サンフランシスコやニューヨークを中心として若者のボヘミア的なグループがいて、もうアメリカの文化は終わりだよ、何とか革命を起こそうよって云って暴れている。その連中が鈴木大拙の『禪』という英語で書いた本を読んで、禪についての面白さに気が付き、その禪の影響を受けてる俳句というものを読んで、特に芭蕉の俳句などを読んで、もちろん英語に翻訳されたものを読んで、俳句というのは素晴らしいものだということを知って、自分たちも短い詩を書こうという気になります。その時に俳句の象徴的なところに興味を持つてくれる。例えばアレン・ギンズバーグ（一九二六—一九九七）は、アメリカの戦後の代表的な詩人の一人でありますが、『吠える』英語では『Howl』という非常に長い詩、一つの長い詩で作られている詩集を発表して有名になりました。そこで、当時のアメリカの社会に対して、非常に厳しい弾劾をしている。そういうアメリカの文化に対する哀歌ともいべき長編詩を書いた人が、

ガラス窓に止まっているハエの

透明な羽越しに見える

雪山の原

という、人間は全然ない、本当に自然だけで詩を書いたのです。これはある意味でヨーロッパのそしてアメリカの詩に革命を起こしたと言えます。本人は非常に長い伝統的な人間中心の詩を書きながら、自然だけで短い詩も書くようになった。それもアメリカの代表的な詩人であった。同じころ、フランスの詩人も、例えばカラフェルテは、自然だけの一行詩

まばゆい垂直線 真夏の

とか

遠くを鳥の細い声猛暑

俳句にそのままなるような詩を書くようになる。

ギンズバーグ達、アメリカのビート派の詩人の三行詩もカラフェルテの短詩も自然を詠い、哲学や人生、神や愛などを詠うことから離れている。自然を詠うようになる。こういうふうにアメリカやヨーロッパの代表的な詩人たちの間に改革が起こってきたわけです。そして、またドナルド・キーン『奥の細道』の訳はさきほどお話ししましたが、同じようにオクタビオ・パスがスペイン語に訳すとか、アントニオ・カベサスがスペイン語に訳すとか、スペイン語や英語圏で「奥の細道」の翻訳が非常にものではやされるような時期になったのです。

そこでヨーロッパでどういう風に俳句が受容されていたかの例

として、スウェーデンの俳句についてお話しします。まずハマーシヨルドっていう名前を覚えておられる方はおられますか。若い方はハマーシヨルドを知らない。これは、国際連合の事務総長になった人で、大変平和主義者だった。このハマーシヨルドは残念なことに、アメリカの方で事件が起こった時に、それを治めに行く途中、飛行機が墜落して亡くなってしまった。大変な外交官であった。そのハマーシヨルドたちが日本の俳句の面白さに気が付いてスウェーデン語で俳句を始める。スウェーデンには一七シラブルスのグループと、それにこだわらないグループというのがあった。いずれにしても俳句を七、八〇年前に始める。その影響がどういうことになったかという点、代表的な二人のスウェーデン詩人をご紹介します。二人とも、ノーベル文学賞をもらった人ですので、極めて国際的にも代表的な詩人です。大詩人。まず、マーティンソン。マーティンソンという人は、一九七四年にノーベル文学賞をもらってんですが、一九六三年の詩集に『チカダ』という詩集があります。チカダって何かというと、蟬。そんなの当たり前じゃないか。いいじゃないか。こうお思いだろうけれど、西洋には、北欧には蟬はいない。それでみなさん、イソップ物語を英語でお読みになると、そこに「アリとキリギリス」という話があることをご存知でしょう。キリギリスは夏の間遊んでばかりいて、秋になって冬になって食べ物がなく

なってアリの所の所へ来て、「おい食べ物をくれよ」って言ったらアリが怒って、「お前夏の間遊んでたのに。」って、こういう話がある。何でギリギリスなの？　ギリシヤ語は蟬なんです。要するに、ギリシヤ語の本来のイソップは「アリと蟬」。ところがギリシヤには蟬がいるし、スペインにもイタリーにも、南にはいるけれども、北欧―特にイギリスとかスウェーデンにはいないから、しようがないからギリギリスにしたというわけで、スウェーデンには蟬はいない。じゃあ、なぜ自分の詩集に蟬を入れたかという、さっきお話しした、

閑さや岩にしみ入る蟬の声

の句の象徴性に驚く。岩にしみ入るって言い方にね、非常に驚く。それで自分の詩集に、「チカダ」という名前を付け、そしてまた自然を詠う詩を書くようになる。こういう風に、俳句はスウェーデンのマーティンソンに大きな影響を与えた。で、そして二〇一一年のノーベル文学賞をもらった、トーマス・トランスストロンメルという人がどうしてノーベル賞をもらったかという、俳句のような詩も書くということが受賞の理由の一つ。長い詩をたくさん書いてるんだけど、こういう短い詩もあることにご注意ください。トランスストロンメルはスウェーデンの俳人協会にも属しています。

蘭の花の窓

すべり過ぎ行く油槽船

月の満ちる夜

まあ、油槽船は人間の作る船にしても、「月の満ちる夜」とか「蘭の花」とか、こういう自然だけで詩が作られてますね。俳句みたいな詩を書いている。

すすけた松が絡みあい

いたまじさは　その湿地にも

永却のわびしさ

\*

あるまなざしの

大きな翳にわたしは遭った

闇の閉ざしのなか

という風に自然を短い詩で書いている。

里程標のひとつづき

みずからさまよひ出たかのように

聴え来る山鳩の声

こういう自然だけで詩を書くようになった。そういう詩人がノーベル賞をもらうということになったというわけですね。ここには、偉大な詩人、アレン・ギンズバーグとかトランスストロンメルという偉大な、それぞれの国を代表するような大詩人についてお話しをし

て、その人々にどういふ風に俳句のような短い詩が影響を与えたかというお話しをしました。しかし、一般の民衆もたくさん俳句を書く人がいて、世界中にたくさんさんの、日本のような俳句のような詩を書く人が増えたことを強調しておきましょう。

具体的にお話をもうする時間がありませんけれども、俳句が非常に世界的に広がっている。なぜ広がったかということについて考えてみましょう。まず俳句を支える精神、基本的には自然との共生の基礎にある思想、こういうことがあるわけですね。そして先ほど伊藤先生も、共感っていう、お互いに共感しあうということの重要性が連句にあるというふうなお話をなさっていたと思いますが、その共感する、そして特に自然と共感する、自然と共生する、こういうふうな考えが重要で、その裏側にはアニミズムという考えがある。アニミズムというのはどういふものかということ、自然界の万物を大切に。海も神様だし、雷も神様だ、山も尊敬する、というふうに全てのものを、神様だと考える。そういう自然界の万物を大切に尊敬する。と同時に、蝶々も蛇も自分たちと同じように生きていくものであるということで、全ての生物の命を大切に。自然と人間の共生を大切に。芭蕉の俳句にもアニミズム的なこういう精神があることにご注意ください。

このことは極めて人間的なことを中心にするヨーロッパの文化と

は対立するものであって、現にヨーロッパの特にキリスト教のような一神教を信じる人は、こんなアニミズムなんていう原始的なものだめだと言つて、否定してしまう。しかし現在改めて自然との共生、温暖化の時代、自然を守らなきゃならない、自然が破壊されていく、こういうことが問題になっている時代に、改めてアニミズム的な思想が見直されつつある。アニミズムは今申しましたように原始的未開という考えがあるけれども、優れた今日的意味があつて、特に、異宗教、異文化の紛争を解決するために、もう一度この自然を大切にするというアニミズムの原点にもどつて、寛容な精神を育てて協調と平和を生み出していこうではないかと私は言っているわけです。東アジア人はアニミズムの考えを今でもどこか持っている。もちろんそれぞれキリスト教であつたり仏教であつたり神道であつたり、色んな宗教を持っていても、その下にある共通した自然というものに対する尊敬の念を持っている東アジア人には、これができると思うんですね。

それではなぜ俳句が世界でこんなに広がつてくかという、偉大な詩人だけでなく一般の人の間でも、特に外交官であるとか絵描きであるとか、お医者さんであるとか、そういう人々も含めて俳句が盛んになっているというのは、まず短い詩であるからということです。短いから誰でも書ける。こういうことで、詩人たちも俳句詩を



書くようになる。同時に自然を大切にしていることがある。こういうことで、詩人が書くだけでなく一般の人も俳句的な短詩を書くようになる。で、短いから誰でも書ける。長い、一万行もある詩を書けたって一般の人ではできない。そこで面白いことが起こっている。俳句の逆輸入、と私は言うんですけれども。日本人で、英語で俳句を書く人が増えている。若者に。誰でも千、千とは言わないけど五百くらい英単語を覚えていますよね。ましてや辞書があればもっと使える。千語くらいあればね、俳句だったらぞろぞろできるわけ。だから日本人の英語力でもって俳句なら作れる。私はアメリカに長くいましたけれども最後に帰ってくる理由の一つは、アメリカで詩を英語で書くことはできないよなあ、こりゃやーめたって帰ってくるわけ。だから俳句だったら良かったですね。あんな頃からもっと俳句が盛んなら、アメリカで俳句を作って、アメリカで俳句を作る俳人として有名になったほうが良かったかもしれない。まあ、冗談はともかくとして、そしてまた、繰り返しますけれども、俳句は短いことと自然を中心にした叙景性がある。ですからテーマだって愛情だの、神様への讃歌などか難しい哲学なんていうとかなかなかできないけれども、短くて、今日のトマトは美味しかったとか今日は朝寒かったとかそういうことを言えば、そのまま作りゃいいってわけで、誰でも作れる。短くて自然を歌えばいい、誰でも作

れるってことで世界中の人たちが俳句を楽しむようになってきた。

というわけで、例えば私のある友人がフランスでタクシーに乗った、それで降りるときに運転手が「あなた商売なんなの」って聞いた。「私は poet、詩人だ」って答えた。その友人は俳人ですよ、本来は。そしたら運転手がびっくり仰天してはあ、そうですか、すごいですねってちよつと怖そうな顔して答えたそうです。そうですよ、フランスで詩人って言ったら本当のエリートなのです。ヨーロッパで詩人っていったらフランス全国でみたって五千人いるかないか。日本みたいに百万人の詩人がいるなんて言ったらびっくり仰天する。そのくらい詩というのは難しいものなんです。それをもうこの頃我々は俳句詩人だって言って威張って歩いているわけだけども。気をつけたらいいですよ、ヨーロッパに行くとき詩人は変人かなと思われる時がある。詩を書く人は変人、非常に学があつて、よく単語も知ってるというようなことがある。哲学も知ってる。

ですが、俳句っていうのはそんな難しいこと言わずに短くて自然を詠えばいいから誰でも作れるから、セネガルに行ってもインドに行っても、南アフリカに行ってもオーストラリアに行ってもどこに行っても、ロシアに行っても俳句を作る詩人がこの頃出てきた。さてこれを応用しようって私は言ってるわけです。イスラムの連中がキリスト教徒と、それからユダヤ教徒と喧嘩しますよね。皆さんコー

ランをお読みになった方はおられますか。コーランを読むと面白い。はじめの方にユダヤ人と仲良くしろと書いてある。なぜかつていうとイスラム教つていうのは本来ユダヤ教の旧教、ようするに旧約聖書のようなことから出発するわけです。だから私にとつて見ればイスラムというのはユダヤ教の変形である。キリスト教はもちろんユダヤ教の変形である。コーランを読むとイエス・キリストも預言者なりと書いてある。ただしモハメッドの方がもっとえらい預言者。でもイエス・キリストも預言者の一人だと認識してるわけです。イスラムもキリスト教も、ユダヤ教から生まれたのに喧嘩ばかりしているんだけど、その連中はみんなもともと同じ宗教なんです。要するに日蓮宗と禅宗が喧嘩するみたいなんです。だから、あなた方よ、自然へ戻れ。自然の美しさを見ると私は言うわけです。もっと自然を大切にするっていう気持ちになろうじゃないか。しかも俳句はせいぜい三単語、四単語、三単語で一〇単語くらいで作れるよね。そのくらいなら辞書さえあれば読める。これ一万語もあるような詩だったらとても辞書があつても読めないけども、一〇単語くらいだったら一七字くらいだったら、誰でもお互い読める。日本語が読めない人でも日本語と英語の英和と和英の辞書を与えてやれば、アメリカ人だつてヨーロッパの人だつて日本の俳句がわかるわけです。ただしローマ字で書けてればね。そういうふうにして一〇

単語くらいだったら五七五くらいだったら誰でも理解できるわけです。短い詩、短詩であれば、異文化を持ちながらも読みあつて相互理解することができるじゃありませんか。というようなところに俳句の応用があるわけです。

ですから俳句を作りあつて、そして一つ世界を平和にしようではないかと。事実外交官なんかでも大変俳句好きが多い、あるいは政治家などではオバマさんが俳句を作っていましたね。たかさんの政治家が、日本へ来ると俳句を作る。日本の政治家はあんまり作れないけれどもね。外国人の方がつくるでしょ。というわけで俳句を作ることによつて違う宗教を持つていても仲良くできるじゃありませんか。相互理解をしようではないか。俳句は自然中心で叙景詩である。印象を大切に。俳句は短詩であり自然中心だから、詩はエリートのみのものでなく大衆のもの、世界の詩への作家の拡大が行われていく。専門的詩人でなくても誰でも詩が作れることは海外では革命的なことであるわけです。個性ばかり重視するヨーロッパにとつても俳句というものは革命的なものです。皆さん俳句を大いに作つてお楽しみください。ちょうど時間が参りましたので私のお話はここで終わることに致します。

(4)有馬先生への質問・有馬先生からのお言葉

司会…東西の詩の違いから最後は世界の平和まで大変興味深いお話、まことにありがとうございます。それでは、極々短い時間ではありますが、有馬先生に事前に勉強した学生たちからの質問に答え頂く時間を持ちたいと思います。よろしくお願い致します。

有馬先生…どうぞ。

司会…はい。まず一点目ですけれども、先ほど後半の方で海外で俳句が広まっていった、海外で俳句が広まり、そして外国の言葉で外国人、外国の人によって俳句というものが作られるようになったというお話でしたけれども、そういった短い詩、俳句として作られた短い詩というのは、例えば日本ですと五七五、季語が入るとかですけれども、そういったところが俳句と認められるところなんですか。

有馬先生…はい、もうそれはここでも申しましたように、俳句は自然中心に叙景詩である。短いこと。自然中心に。だから誰でも作れる。これが俳句の特徴。それに西洋の詩は例えばソネットってご存知よね。シェイクスピアはソネットを沢山作っています。ソネットっていうのはあれ短い方なだけで一四行いるんですよ。一つ一つの

行が単語が五、六語どころか時には一〇もあることもある。五、六語から一〇単語くらいが一四行くらい。西洋にとってはソネットは短い方だけれどもそれでも俳句よりはるかに長い。だからこれを作ろうと思ったら大変です。俳句は誰でも作れるのです。

司会…短いもの、ずっとずっと短いもので自然中心である、そして



皆が作れるものが俳句であるというふうに理解するということですね。

有馬先生…短く表現することは非常に大切ですね。自然科学の上でも論文、こんな長い論文でも一つの式で表せるくらいのがある。式で表すとか絵で表すといっぺんにぱっとこうわかる。短くすることが大切。

司会…ありがとうございます。短く書くということです。またもう一つお伺いしたいのが、前半の方で西洋の詩の特徴と東洋の詩の特徴についてご説明頂きましたけれども、東洋の方に自然を読む景詩が早く発達したのはなぜでしょうか、という質問でした。

有馬先生…非常に良い質問ですよ。非常に重要なポイントです。それから、もう一つ同じようなことがある。例えば、ノートルダムっていうフランスの、パリのノートルダム、塔が2つあるよね。綺麗に左右対称の塔がある。日本にああいう塔ありますか。無いね。東京都庁が例外です。それから中国のお寺に行くとね、東の方だと、逆もあるけど、まあ東の方に鐘つき堂があって対称的な西の方に太鼓堂がある。日本では無いですね。ある？日本で太鼓堂があるところって言ったらどこかな。せいぜい黄檗宗の萬福寺。で、太鼓どころっちゃったの。だけでもね唐招提寺に行くと流石に鑑真和尚が作った時には太鼓堂も作ってるんだ。唐招提寺はよく見るとね鐘楼

と鼓楼あるいは鼓楼っていう太鼓堂がある。鐘つき堂。ヨーロッパに行くとか称的な建物が圧倒的に多い。中国は今言ったように建物は対称的だけれども庭を見てください。中国の庭も全く自然。例えば蘇州の庭なんてもうめちゃくちゃだね。一方ヨーロッパの庭園は綺麗に対称的だね。ベルサイユ宮殿の庭なんて大変対称的です。日本の庭はもうはじめからめちゃくちゃだね。対称性がどうしてこんなにめちゃくちゃになってるの日本は。中国は中間だ。中国は中間だから中国っていうわけじゃないですよ。ね、なぜでしょう。まず太鼓堂が日本で無くなったのはなぜか。お城に行くと太鼓があるんだよね。天守閣に行くと大抵太鼓があつてどーん、そろそろ起きろ、出てこいって言って叩くんだよ。だからどうもね太鼓はお城に取られちゃった、と私は思ってる。これはちょっと考えてください。なぜそういうふうには、東洋の文化、西洋の文化、特に日本の文化っていうのは対称性でも違うか。一つの理由は台風があるから。モンsoon地帯であるから。そのために和辻哲郎先生っていう人が「風土」って本書いています。あれが東大の学生への講義だったって、おそろしい講義を昔やってたもんだって思うんだけど。和辻先生の本を読むとヨーロッパの風土は非常に静かである。台風も何も無いから、ヨーロッパに行つて写真を撮つてご覧になると、木が大変対称的に育っている。日本や中国は台風が吹いたり梅雨が降つた

りするから木がめちゃくちゃである。対称性が自然に失われている。ヨーロッパは対称性がある。風土に違いがある。それが原因であると考えられます。さて詩については私もね、わからないが、やはり風土の違いでしょうか。ヨーロッパ人はローマ以後技術に自信があり、事実西欧の森や林そして草原も開拓して成功しました。それで人間中心の詩を書くようになった。一方東洋では、地震や台風などの天災がよく起るし、中国の大河もよく洪水を起します。それで自然の美しさと同時に偉大さ恐ろしさを、中国、韓国、日本の人々は感じ続けてきたからではないでしょうか。これが一つのお答えです。司会…ありがとうございます。それでは最後にお問い合わせなんですけれども、今日多く学生が拝聴しておりますが、これからの未来を担う若い学生たちに、ぜひ先生から、有馬先生でしたら俳人としてあるいは物理学者としてでしたけれども、どうやって自分の道を選んでいったら良いのかをぜひ。

有馬先生…好きなことやんなさい。自分のやりたいことをやりなさい。徹底的に自分の目標とすることをやんなさい。負けるな。今、若い人は、私が非常に心配してるのは、先ほど申しました戦後に似てるところがある。これから、明日実はその講演をするんだけれども、私が非常に心配してるのは日本の科学技術の成長は二〇〇〇年で終わったと思われることです。現にこの頃東芝の原子力をめぐる

ウエスティングハウスとの喧嘩であるとか、日本の伝統的な技術である半導体の技術が海外に売りに出されている。それから三菱の飛行機は今にもできそうになっているのに未だにMRJは動かない。それからタカタのエア・バッグズ。ああいうのがみんなだめじゃない。そして論文も、科学技術の論文も二〇〇〇年頃に世界で第二位になった。万歳つて言つてた。アメリカの次は日本、それからドイツ、イギリス、フランスというふうになってた。二〇〇八年を契機にしてその順位はどうなったか。一番アメリカ、変わらない。二番が中国、そしてヨーロッパが巻き返してきて三番がドイツ、四番がイギリス、やっと五番に何とかしがついてるのが日本。しかもそれももう後少してフランスに負けるでしょう。せっかく世界の第二位まできた科学技術も今第五位になっている。大学ランキング。ここは大学だから申し上げる。大学ランキングも、二〇〇〇年頃は例えば東大のランキングとか京都大学とかのランキングは世界のランキングで随分上だったのが、今がたがたつと下がってる。そして私が散々手伝ったシンガポール国立大学の方が、あるいは香港の科学技術大学とか香港大学の方が、北京大学とか、散々手伝つてああしろこうしろつて言つたら皆上に行っちゃってる。東大より上になつてる。若い人にお願いは、なんとかしてそれを取り戻してほしい。その順位が下がった原因の一つは、一九八九年、平成元年

の頃には一八歳人口は二〇五万いた。今それがいくらになったかご存じですか。一二〇万。そして来年は一一九万。六割になっちゃった。そのことのために若者の力が弱くなってきた。それ以上に、大問題があつたつて、財務大臣にも散々言つてるし、総理大臣にも文句言つてる。文科大臣はもちろん賛成して文句一緒に言つてくれる。教育費が日本は圧倒的に少ない。GDPであたると初中教育でも2.7%で、GDPあたり2.7%で世界でピリから三番。上からじゃないよ。ピリから三番。高等教育に至つたらば長いあいだ0.5%でやつと0.58くらいで0.6。これは先進國中、最低。OECDの平均値は1%。それに対して日本はよく頑張つてるよね。半分でここまでやつてるんだから。大学の先生たちも大変ですよ。私もそうだったけれど。わずかなお金で良い教育を下さい。それにしちや日本の教育は良いんですよ。子どもたちの教育は。TIMSSという国際比較をすると、小学生の四年生・中学校の二年生は理科と数学は必ず五位以内、五番以内に入る。高校生も理科とか一般のリテラシーとか数学力のリテラシーを見ると大体五、六位の中に入る。理科なんかは三番とかだ。こういうふうな成績、こんなお金が無いとこでこんな成績を持てるのは日本の先生たちが頑張つてるから。だから私はともかく教育費を上げなさいと主張しています。若者を、六割になつた若者を、二倍の学力にしろ。せめて一・五倍の学力にしろ。

進学率は、平成元年の頃の大学への進学率は四人に一人。今は二人に一人。犬も歩けば大学生に当たる。そのくらい大学生が多くなつた。それを磨かなきゃだめですよ。そんな安い金でもつてね、良い教育だけやれやれつたつて無理だよ。だから大学の先生達が決りして、そして高等教育費をせめて0.8%にしろと叫んでほしい。なぜか。韓国が長い間日本と同じで、日本がGDPあたり高等教育費が0.5%の時に韓国は0.6%。韓国は初中教育の方を上げて、日本が2.7%の時韓国は3.4%。だから韓国の初中教育はものすごく伸びたのですよ。このところちよつと初中教育のお金が減つてきたなあ、どうしたのつて心配してたら何、高等教育費がみるみるうちに上がつて今0.9%に持つてつた。0.6から0.9にこの三、四年で上げた。二倍にしたんですよ。ヨーロッパ並みですよ、もうね。韓国の頑張り方を私大いに褒めてます。素晴らしい。中国はもちろんものすごく伸びてる。だから日本の高等教育費・初中教育費を伸ばして、若者にもつと力を与えるべく教育を良くしてあげて、働く場を与えてあげてほしい、ということをお願いして、若者に対しては好きなことをやんなさい、一生かかつてそれを育てなさい、志を持って、ということをお話して、長くなつたからこれで終わりましょう。

司会…はい。ありがとうございます。それでは時間も迫つてまいりましたのでこれにて有馬朗人先生の講演会を終わらせて頂きます。

先生どうもありがとうございました。今一度大きな拍手を。

(大拍手)

有馬先生…特に若者よ、まずは健康ですよ。頭じゃないんだよ。大  
体皆さん頭は揃ってるから、健康に充分気をつけて頑張ってください  
い。宜しく。

司会…ありがとうございます。

(再び大拍手)

※講演会の実現のために多くのご支援をいただいた俳句ユネスコ無  
形文化遺産登録推進協議会事務局に心からのお礼を申し上げます  
す。国際俳句交流協会をはじめとする俳句協会の方々、東海地区  
の結社の方々、ご協力くださいました方々に、心から感謝の念を  
お伝えいたします。

(伊藤伸江)